

私の古典学習法

本誌審査委員 江崎 美里 〈後編〉

古典学習と書写—硬筆作品に活かす

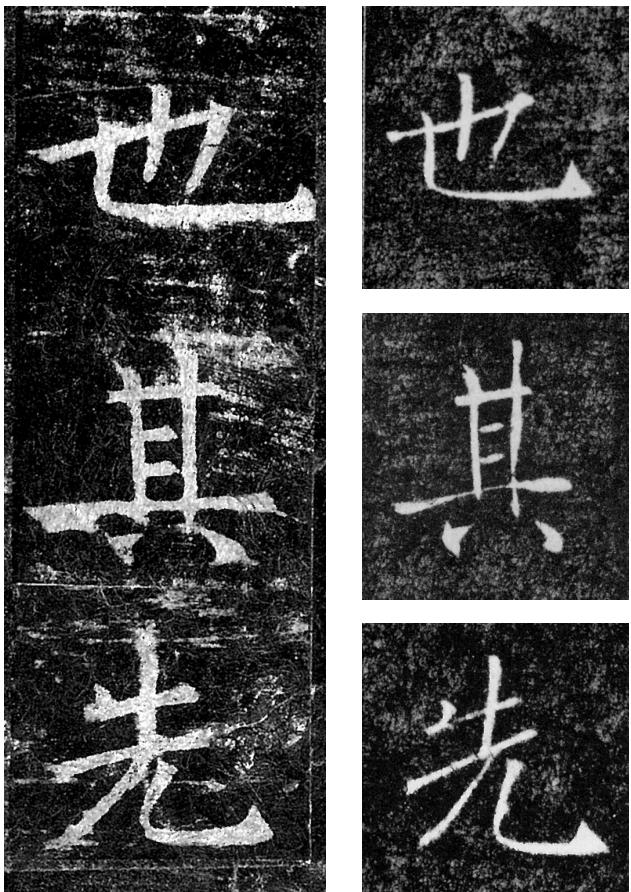


私たち書写書道に携わっている者にとって日常において文字を書くことは当たり前ですが、多くの人々にとって文字を書く機会はどんどん減ってきています。

手書きで手紙を送ることはとても少なくなり、代わりにパソコンやスマートフォンでメールを書くことが当たり前になりました。

文字を手書きする時、多くの人は普段目にする「活字」が正しいバランスだと思われているのではないか。書写書道を学んでいる私たちは古くからの文字文化としての古典の存在を知っています。たくさんの古典に触れて、古典を活用して学習することで、文字文化を次の世代に伝えていきたいものです。

一 古典の展示を見る



図版1 右『雁塔聖教序』しなやかな運筆
左『孟法師碑』力強く直線的な表現

私は古典を見ること、臨書することが好きです。今まで一番心躍った瞬間は、二〇〇六年に東京国立博物館で開催された「書の至宝」展を見たときです。甲骨文から近代の書まで、時代を超えたありとあらゆる書が集い競演していました。文字そのものだけでなく、

長い時間を超えてそこに残っている墨や紙の素晴らしさを感じ、中でも空海の『風信帖』は紙面から光を放っているかのようでした。

二〇一九年に開催された「顔真卿」展では、顔真卿の書だけではなくたくさんの古典が展

褚遂良の『雁塔聖教序』は細めの線でしなやかな書に見えますが、実物はどんな太さで書かれていたのか想像します。また、褚遂良は若い頃に『孟法師碑』や『伊闐仏龕碑』を強い直線的な線で書いています。しか

です。今まで一番心躍った瞬間は、二〇〇六年に東京国立博物館で開催された「書の至宝」展を見たときです。甲骨文から近代の書まで、時代を超えたありとあらゆる書が集い競演していました。文字そのものだけでなく、

が摩耗していて、石碑が造られた頃より細くなっている場合が多いのです。そのことを頭において見えている線の太さよりも太めに臨書する必要があると考えます。

褚遂良の『雁塔聖教序』は細めの線で

示されていました。その中に『九成宮醴泉銘』の拓本が数種類展示されており、拓本が取られた時期によって線の見え方がかなり違うことを改めて認識できました。

私たちが目にする古典の線は、石碑の表面において見えている線の太さよりも太めに臨書する必要があると考えます。

し線の感じは違っていても文字の骨格は「雁塔聖教序」と共通しています(図版1)。「雁塔聖教序」を臨書する時は、こうした事を頭に置いて書くようにして、ただの「ヒヨロヒヨロとした楷書」にならないよう心がけたいものです。

II 活字の影響

もうずいぶん前のことですが、回覧板に添えてあった手書き文字を見て驚いたことがあります。活字ではないか?と思うほど、横画は水平できつちりと正方形に収まつた几帳面な文字でした。私たち書写書道に携わる者にとっては上手いとは思えないような文字ですが、確かに整っている丁寧な文字でした。

これは書写書道を学んでいない人の手書き文字が活字化している極端な例でしたが、私たち書写書道を学ぶ者も活字の影響を受けていると感じています。

皆さんは古典の形臨をしている時、案外一枚目が上手に書けたことがありますか。一枚目は古典の特徴を詳細に観察して慎重に書くのですが、数枚書いていると手本から少し目が離れて、自分自身の文字のバランスに戻つてしまことがあります。無意識のう



図版2 上 上の部分と下の部分をずらしている
下 中心をそろえて書いている

ちに自分の中に染み込んでいる「活字文字」のバランスに戻ってしまう……生徒やお弟子さんを指導している中で私はそう感じことがあります。

前編（8月号）で取り上げた『雁塔聖教序』の「業」という字は、本来上部分と下部分の中心をずらして書くべきところを、中心をそろえて書いてしまったという、筆法は古典に準じていても私の頭の中にある「活字文字のバランス」に戻って書いてしまった例です（図版2）。

明朝体活字に影響された文字例と筆者が書写の手本文字を書く場合の文字例をあげてみます（図版3）。

私が書写の手本文字を書く時には、活字と古典の中間を意識して書くようにしています。現代に生きる私は活字の海の中に入るので、頭の中の活字のバランスを完全に排除することができませんが、しっかりと古典を意識しておこうで、「手書き文字のバランス」を保

つよう心がけています。

III 古典を硬筆作品に活かす試み

頭に置いているとバランスが活字寄りになります（図版3）。

がちなので、私たち書写書道に携わる者は常に古典を頭の中心に置いて書く必要がありま

す。日頃からたくさん古典の臨書をして、自分の中の文字感覚を養い育てていくことが、手書き文字の文化を守っていくことになります。

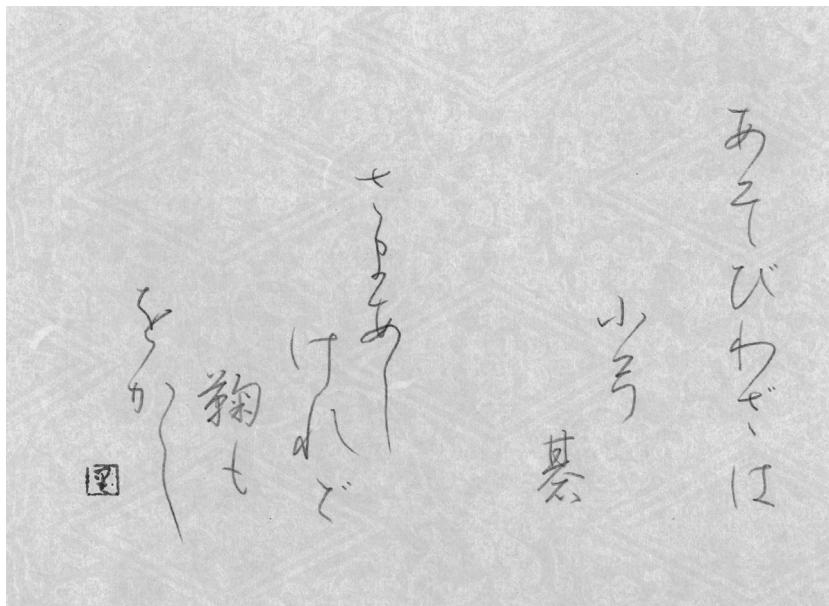
私は長い間本誌で硬筆の課題手本を担当していました。高円宮杯展には硬筆の部があり、たくさんの方々が出品してくださいるので、私も手本揮毫者特別作品として硬筆作品を出品してきました。しかし硬筆は用具が鉛筆かペンなので、太細たいさいを表しにくく毛筆よりも表現の幅が狭くなります。硬筆作品としてどうあ

多宝塔碑	雁塔聖教序	明朝体活字	明朝体活字の字形	明朝体に影響された文字例	筆者が書いた文字例

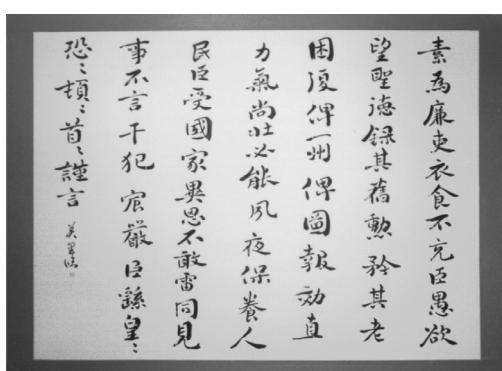
図版3 手本文字を書く場合の文字例

名交じり文（俳句や短歌など）を好んで書いていました。散らし書きを使い空間に変化を持たせるように工夫すると、鉛筆やペンによる太細だけでも作品として成り立ちやすくなります（図版4）。なるべく多くの方に言葉を読んでいただきたいと考えて変体仮名は使つていません。

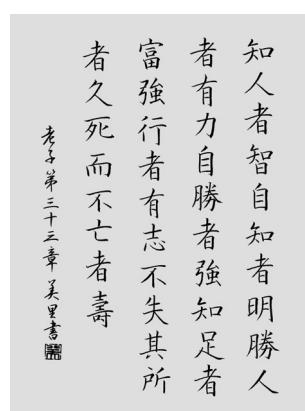
そして最近は、硬筆作品の表現方法の一つか試みとして、漢字楷書で書寫的な書き方を



図版4 硬筆作品『枕草子』より 鉛筆を使用



図版6 臨鍾繇『蘆季直表』 大学生時代の作品



図版5 第34回高円宮杯特別作品
『老子』より 筆風サインペン使用

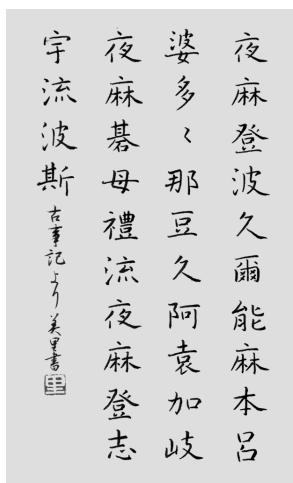
さて最後に、書とはどんなものか、何を伝えるべきなのか。私は若い頃からこの事をずっと悩み、考え続けています。この答えを探すため、まだまだ私の古典に向き合う日々は続きます。

うと思いました（図版7）。

残しながら「古典の香り」を入れた作品を書いてみたいと考えるようになりました。

硬筆作品に合う、自分が好きな基盤となる

複雑なペンの動かし方をしなければならず、リズムよく自然に表現して書くのは難しいと感じました（図版5）。



図版7 第38回高円宮杯特別作品
『古事記』より 筆風サインペン使用